

松本古墳群

一般国道9号松江道路(西地区)建設
予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書1

1994年3月

施工事務所
有委員会

松 本 古 墳 群

一般国道9号松江道路(西地区)建設
予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書1

1994年3月

建設省松江国道工事事務所
島根県教育委員会

序

建設省松江国道工事事務所においては、松江地区の一般国道9号の交通混雑を緩和して、円滑な交通を確保し地域社会の発展に資するため、一般国道9号のバイパスとして松江道路の建設を進めています。

道路整備に際しては、埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ関係機関と協議しながら進めていますが、避けることのできない埋蔵文化財については、道路事業者の負担によって必要な調査を実施し、記録保存を行っています。

当松江道路においても、道路予定地内にある文化財について島根県教育委員会と協議し、同委員会のご協力のもとに昭和50年度から発掘調査を行っています。

本報告書は、平成5年度に実施した遺跡調査の結果をとりまとめたものであります。

本書が郷土の埋蔵文化財に関する貴重な資料として、学術ならびに教育のため広く活用されることを期待すると共に、道路事業が埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ進められることへのご理解を頂きたいと思うものであります。

最後に、今回の発掘調査及び本書の編集にあたり、ご指導ご協力いただいた島根県教育委員会並びに関係各位に対し深堪なる謝意を表すものであります。

平成6年3月

建設省中国地方建設局松江国道工事事務所

所長 神長耕二



序

島根県教育委員会では、昭和50年度から一般国道9号松江道路の建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施しています。

最初の調査から数えて19年が経過し、たくさんの貴重な遺構、遺物が発見され、出雲の古代史を解明するうえで大きな手助けになったと考えております。

今年度は、松江道路西地区に当たる松江市乃木福富町に所在する松本古墳群の発掘調査を実施しました。この周辺は、これまで調査を行ってきた意宇平野を中心とした東地区と違い、歴史学的には取り扱われることが少なかった地域です。

本書は今回の調査で得られた成果の報告であります、これがこの地域の古代史解明の端緒となるよう、広く活用されれば幸いと存じます。

末尾ではありますが、調査にあたってご指導、ご協力いただきました関係各位に心よりお礼申し上げます。

平成6年3月

島根県教育委員会

教育長 今岡義治



例　　言

- 1 本書は、平成5年度（1993年度）に島根県教育委員会が建設省中国地方建設局から委託を受けて実施した、一般国道9号松江道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本書では松江市乃木福富町大字松本に所在する松本古墳群の発掘調査報告書である。
- 3 採図中の方位は国土調査法による第Ⅲ座標系X軸の方向を指す。
- 4 出上遺物および実測図、写真は島根県教育委員会で保管している。
- 5 掲載図面はおもに柳浦俊一、原昌徳が作成し、遺物整理は堀江五十鈴、若佐裕子、藤原須美子があたった。
- 6 事務局　　広沢卓嗣（文化課長）　山根成二（同課長補佐）　中島哲（同文化係長）
伊藤 宏（同主事）
勝部昭（島根県埋蔵文化財調査センター長）　久家儀夫（同課長補佐）
工藤直樹（同企画調整係主事）　有田 實（島根県教育文化財団嘱託）
調査員　　宮沢明久（文化課主幹　島根県埋蔵文化財調査センター調査第1係長）
原田敏照　勝瀬利栄（同主事）内田律雄（同調査第4係長）　柳浦俊一（同主事）
原昌徳（同2係臨時職員）
- 7 本書に掲載の地形図のうち、遺跡分布図は建設省国土地理院発行5万分の1、地形測量図は島根県教育委員会が（株）ワールド航測コンサルタントに委託して作成したものである。
- 8 本書の編集、執筆は柳浦が行った。

目 次

1. 調査に至る経緯と経過.....	1
2. 遺跡の位置と歴史的環境.....	1
3. 検出遺構.....	5
1号横穴墓.....	5
2号横穴墓.....	9
落し穴状遺構.....	14
4. 結語.....	15

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡.....	3
第2図 松本古墳群地形測量図.....	4
第3図 1号横穴墓実測図.....	6
第4図 1号横穴墓土層図.....	7
第5図 1号横穴墓奥壁（左）および前壁（右）加工痕.....	7
第6図 1号横穴墓出土状態.....	8
第7図 1号横穴墓出土上器.....	9
第8図 2号横穴墓実測図.....	10
第9図 2号横穴墓遺物出土状態.....	11
第10図 2号横穴墓出土土器.....	12
第11図 2号横穴墓出土上器.....	13
第12図 2号横穴墓出土上鉄器.....	13
第13図 落し穴状遺構.....	14

図 版 目 次

- 図 版 1 上………松本古墳群遠景
1 下………松本古墳群近景（調査前）
- 図 版 2 上………松本古墳群丘陵頂部（調査前）
2 下………松本古墳群近景（調査後）
- 図 版 3 上………1号横穴墓全景
3 下………1号横穴墓検出状況
- 図 版 4 上………1号横穴墓玄室土層堆積状況
4 下………1号横穴墓羨門土層堆積状況
- 図 版 5 上………1号横穴墓玄室
5 下………1号横穴墓玄室前壁
- 図 版 6 上………1号横穴墓羨門・羨道
6 下………1号横穴墓右側壁加工痕
- 図 版 7 上………1号横穴墓奥壁加工痕
7 下………1号横穴墓前壁加工痕
- 図 版 8 上………1号横穴墓土器出土状態
8 下………1号横穴墓土器出土状態
- 図 版 9 上………1号横穴墓上層出土状態
9 下………2号横穴墓全景
- 図 版 10 上………2号横穴墓検出状況
10 下………2号横穴墓土層堆積状況
- 図 版 11 上………2号横穴墓上層堆積状況
11 下………2号横穴墓遺物出土状況
- 図 版 12 上………1・2号横穴墓出土土器
12 下………2号横穴墓川土土器

- 図 版 13 上……………2号横穴墓出土土器
13 下……………2号横穴墓出土土器
- 図 版 14 上……………2号横穴墓出土土器
下……………2号横穴墓出土鐵器
- 図 版 15 ………………2号横穴墓出土鐵器X線写真
- 図 版 16 上……………落し穴状造構
16 下……………落し穴状造構土層堆積状況

1. 調査に至る経緯と経過

一般国道9号松江道路は、松江市街地の交通渋滞の解消を目的に昭和47年に都市計画決定され、八束郡東出雲町から八束郡玉湯町に至る10.7km区間において建設工事が進められている。埋蔵文化財調査は、平成3年度（1992）までに八束郡東出雲町から松江市東津田間の8遺跡の調査が完了し、八束郡東出雲町から松江市乃白町に至る9.1km区間についてはすでに供用が開始されている。

残りの松江市乃白町から八束郡玉湯町布志名に至る1.6km区間（「松江道路西地区」と呼称）については、平成2年（1991）に建設省松江国道工事事務所から予定地内の遺跡の照会があった。

これを受けて鳥取県教育委員会では同年予定ルート内の分布調査を実施し、9遺跡が確認された。予定地のうち松本古墳群の一部に計画された工事用道路の着工が、隣接する代替開地造成との関連でとくに急がれたため、平成5年度はこの部分の調査を実施することとなった。

今年度の調査は平成5年（1993）5月6日から開始した。調査は、まず丘陵頂部から南側斜面の表土を重機によって除去し、その後人力によって遺構を精査した。地表面の観察では丘陵頂部に平坦面が見られたことから住居跡などが予想され、また斜面には横穴墓の存在が予想された。精査の結果、この丘陵は斜面が地崩れによってかなりの部分が変形していることがわかった。とくに南側斜面の西半分は地崩れが著しかった。地崩れが比較的少ない東側では、予想通り横穴墓が検出されたが、その数は2基にとどまり、2号横穴墓は玄室の2分の1しか残存していなかった。一方丘陵頂部では、地表観察で確認できた平坦面は、やはり後世の改変によるものであることが判明し、検出された遺構は落とし穴状遺構1にとどまった。

横穴墓の調査が終了後、さらに北側斜面にも横穴墓の存在が考えられたため、ここにもトレントを4カ所設定し発掘を行った。しかしここも地崩れによる地形の変形が著しく、遺構は確認されなかつた。

6月23日、以上の作業をすべて終了し、本年度の現地調査を終了した。なお、本調査区の発掘終了後の地形測量は、（株）ワールド航測コンサルタントに委託し作成した。

2. 遺跡の位置と歴史的環境

松本古墳群は松江市乃木福富町大字松本に所在する、横穴墓2基で構成される古墳群である。これは宍道湖の南東岸に位置し、八束郡玉湯町との市境にあたる。遺跡はめのうの産地として古くから有名な花仙山から派生する標高約40mの丘陵南斜面にある。この丘陵上から北を望めば宍道湖と

その北岸が一望できるほどの眺望である。

この周辺は丘陵上を中心に開発に伴う組織的な発掘調査が増えつつあるものの、縄文時代の遺跡は発見されていない。ただ、松木古墳群の東側を流れる乃白川流域では蓮花塙遺跡、福富I・II遺跡、乃白遺跡などで石斧が採集されていることから、将来この川の流域で縄文時代の遺跡が発見されることも十分ありうる。

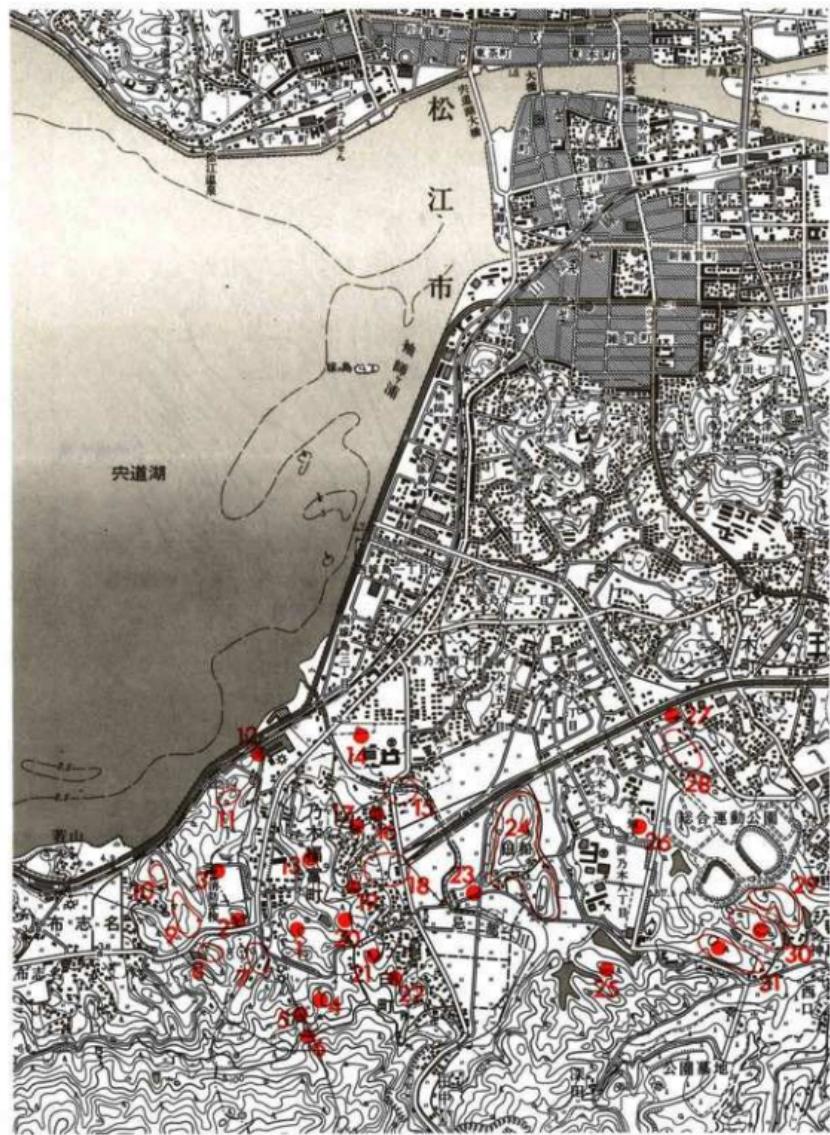
弥生時代の遺跡としては、やはり乃白川流域にある欠田遺跡が前期から後期にわたる遺跡として知られている。中期から後期にかけては乃白川の東側の丘陵に友田遺跡で墳丘墓が築造されている。友田遺跡では墳丘墓6基と土坑墓26基が検出されたが、墳丘墓は弥生墳丘墓としては県内でも最古の部類に入るものである。集落跡としては廻田遺跡で後期の横穴住居跡が1棟検出されている。

古墳時代にはこの周辺にも多くの古墳が築かれるようになる。今のところ前期古墳は発見されていないが、大角山1号墳（全長61.5m）、乃木二子塚古墳（全長36m）などの前方後円墳が築かれたことが注目される。また小規模ながら後期の前方後円墳である田和山1号墳（全長20m）も築かれており、中期以降この周辺に前方後円墳が連続して築かれたことは、この地の重要性、または優位性を示しているのかもしれない。このほか、10m前後の小規模古墳や横穴墓も多く作られている。とくに、この地域の横穴墓は赤蛇原横穴墓群、松木横穴墓群など本遺跡周辺に集中しているのが注意される。

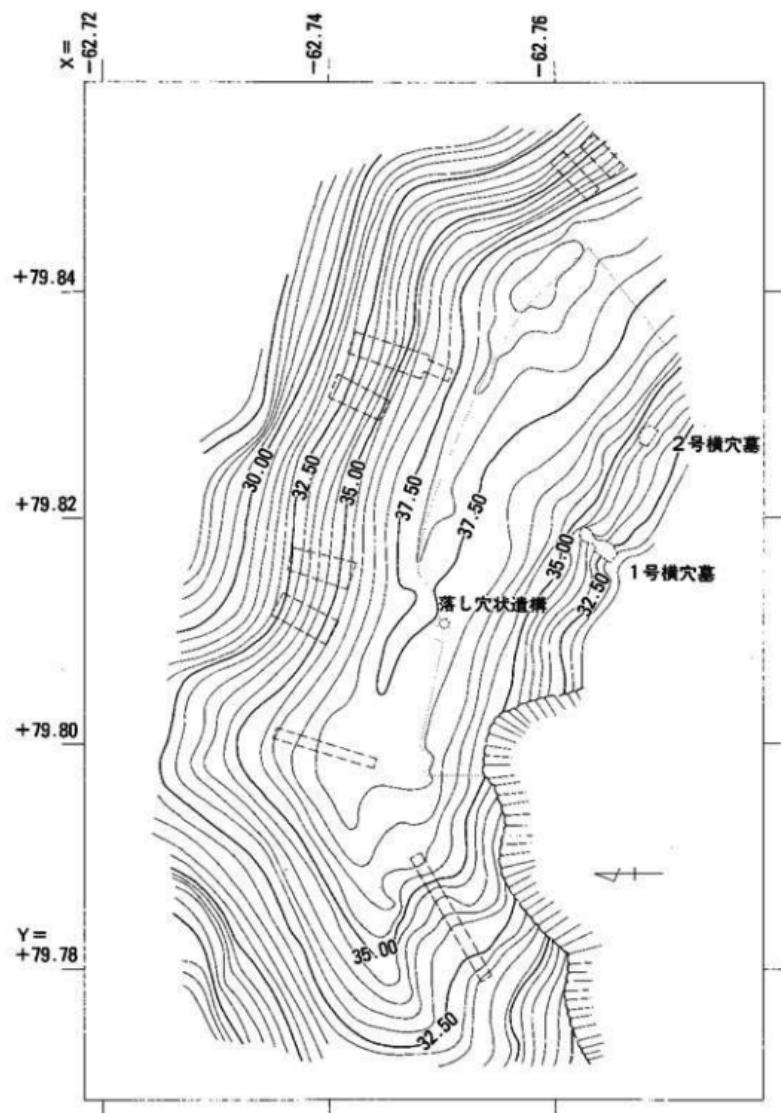
古墳以外では、大角山遺跡、乃白玉作跡、乃白権現遺跡などの玉作遺跡がこの地域に集中している。これはめのうの原産地である玉湯町の花仙山を背景としたものであろう。大角山遺跡では発掘調査が行われ、5、6世紀の玉作生産の状態が明らかにされている。

奈良時代の遺跡として注目されるのは福富I遺跡である。この遺跡は発掘調査は行われてはいないが分布調査で唐三彩が表採され、この遺跡の特殊性が問題となっている。『出雲国風土記』によれば、この付近に当時の官道である「通道」が通っていることから、これに関係する遺跡かもしれない。

- | | | | |
|------------|-----------------|----------------|------------|
| 1. 松木古墳群 | 2. 大角山古墳群 | 3. 大角山遺跡 | 4. 赤蛇原横穴墓群 |
| 5. 松木横穴墓群 | 6. 岩屋口古墳 | 7. すべりざこ横穴墓群 | 8. 足立窓跡 |
| 9. 大谷I遺跡 | 10. 大谷II遺跡 | 11. 二名留古墳群 | 12. 福富湖岸遺跡 |
| 13. 西田遺跡 | 14. 神立遺跡 | 15. 欠田遺跡 | 16. 蓮花塙遺跡 |
| 17. 屋形遺跡 | 18. 福富I遺跡 | 19. 乃白玉作遺跡 | 20. 屋形古墳 |
| 21. 天場遺跡 | 22. 乃白権現遺跡 | 23. 薬師前遺跡 | 24. 田和山古墳群 |
| 25. 大久保古墳群 | 26. 奥山遺跡 | 27. 乃木二子塚古墳 | 28. 長砂古墳群 |
| 29. 神田遺跡 | 30. 勝負谷遺跡 勝負谷古墳 | 31. 渋谷遺跡 渋谷古墳群 | |



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡 1:25,000 (松本古墳群は1)



第2図 松本古墳群地形測量図 1:500

参考文献

- 松江市教育委員会『松江市遺跡地図』1991
鳥取県教育委員会『大角山遺跡発掘調査報告書』1988
加藤義成『山雲国風上記』1965

3. 検出遺構

1号横穴墓（第3～7図 図版3～9）

丘陵の南側斜面に位置し、玄室床面での標高は約35mである。南北方向を向いて作られており、主軸はN38°Eである。全長は約5.2mを測る。ここは、調査前の地表観察でも窪みが認められた。天井部の崩落が地表面にも反映されたものと考えられる。

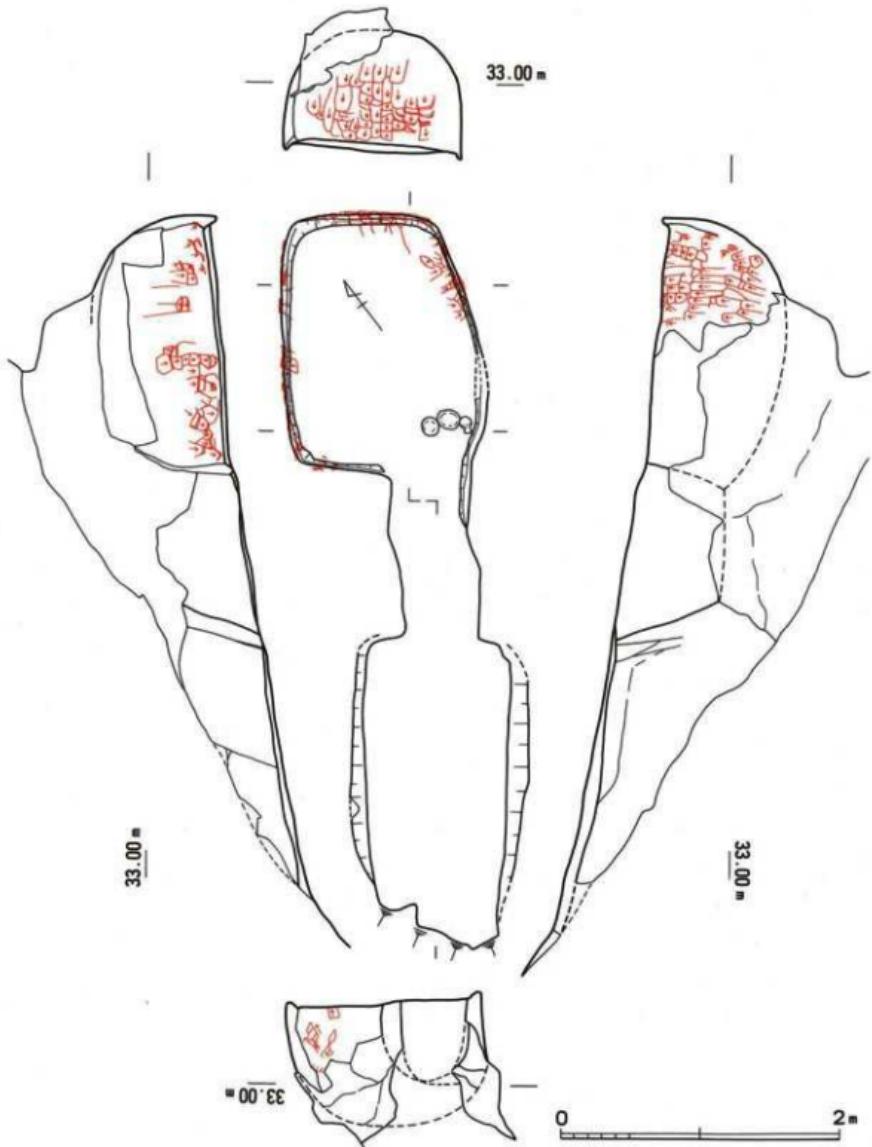
土層の堆積状況（第4図 図版4） 1号横穴墓内に堆積していた土層は11層に分層できた。おまかにいえば、羨道から前庭部には3、6～10層が、玄室部分には4～6、11～13層が堆積していたことがわかる。羨道から前庭部にかけては床面にはほぼ平行に堆積しており、玄室天井部が崩落する前に堆積したように思われる。玄門、羨門部分には、上を埋めた痕跡とか、木製の板を立て掛けた痕跡は確認できず、1号横穴墓の土層はすべて自然堆積と考えられた。玄室天井の崩落土は13層と考えられ、玄室前部が厚く奥壁近くは薄く堆積していた。

以上のことから1号横穴墓では、まず9、10層が堆積した後に天井が崩落（13層）、さらに6層が奥壁に流入した後、順次他の土層が堆積したと考えられる。

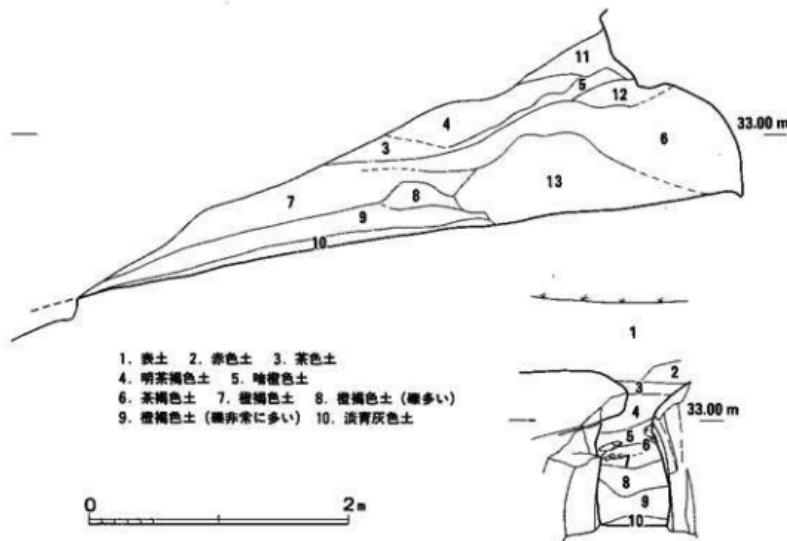
玄室（第3図 図版5～7） 玄室は、平面形が不整形な継長の長方形を呈している。玄室の規模は長さ1.85m、幅は奥壁側で1m、玄門側で1.3m、最も広がる部分で1.45mを測る。天井部が崩落しているため正確な高さは不明であるが、最も残りがよい奥壁近くでは約90cmである。

左側壁はほぼ直線的に作られ、奥壁際、前壁際ともに隅が直角になるよう整形されているが、右側壁は奥壁際から緩いカーブを描いて中央やや玄門よりの位置で最も広がり、そのまま玄門に至る。右側壁と玄門との境にはわずかながら稜線が観察され、かろうじて両者の区別ができる程度である。そのため奥壁と右側壁との交点は鈍角になり、右側壁と玄門との境はあいまいで一見片袖型の平面プランに見える。

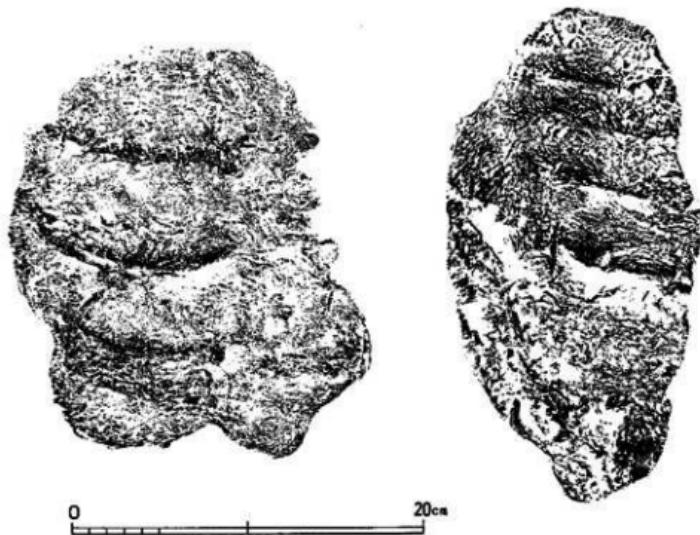
床面は奥壁から玄門に向かって傾斜しており、その比高差は15cmである。玄室の床面周囲には幅3～6cm、深さ1～6cmの排水溝が巡るが、玄門の位置で途切れ一周していない。排水溝は左侧では玄門で終わっているが、右侧では羨門中程まで伸びている。



第3図 1号横穴墓実測図 1:40 赤は加工痕



第4図 1号横穴墓土層図 1:40



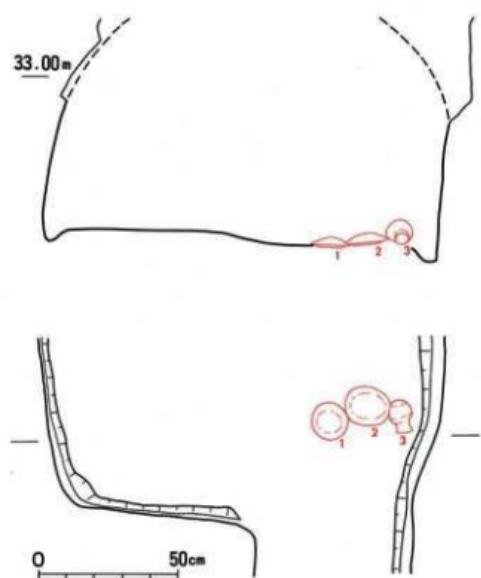
第5図 1号横穴墓奥壁 (左)および前壁 (右)加工痕 1:3
(型取りした標本の拓影であるため加工痕は反転している)

天井は大部分が崩落しており原形を留めないが、棟線や注線などではなく、丸いままである。また、側壁との境には軒線は見られない。

側壁は左右ともほぼ垂直に、奥壁、前壁はやや内傾して作られている。奥壁と左右両壁との境、および前壁と左側壁の境には不明瞭ながら界線が観察される。四壁とも加工痕が明瞭に残り、特に奥壁と左側壁には良好な状態で加工痕が残っていた（第5図 図版6・7）。加工痕は5~15cmの幅で、奥壁と左右両壁は垂直方向に、前壁では左上から右下の方向に削られたことがわかる。加工痕の端部はいずれも曲線を描いており、U字形の鋸のような丸い刃の工具を使用したものと思われる（第5図）。

羨道・玄門（第3図 図版5・6） 長さ1.2m、玄門幅50cm、羨門幅50cmを測る。玄門から羨門にかけて一体化した、細長いものである。玄門、羨門とも、誇り込みなど閉塞のための施設は設けられていない。天井部が崩落しているため断面形は不明であるが、アーチ状と思われる。最も残りがよい部分で高さは60cmである。床面は玄室側から羨門に向かって次第に低くなり、その比高差は約20cmである。

前庭部（第3図 図版3） 長さ2.2m、羨門部分での幅1m、先端部分での幅90cmを測る。羨



第6図 1号横穴墓土器出土状態 1:20

門部分で肩が張り、平面形は細長い長方形を呈する。断面形は上部がやや開く逆台形で、床面と側壁との境は明瞭である。床面は羨門部分が最も高く、先端に向かうに従って次第に低くなり、その比高差は33cmである。壁は羨門近くで約60cm残り、先端部で床面と一致する。

出土遺物（第6・7図 図版8・9・12） 1号横穴墓からは、須恵器が3個体出土したにすぎない。これらは玄室右側壁の玄門近くから原位置の状態で出土した。壁際には直口壺が横転し、それに接するように壺が2個が伏せた状態で置かれていた（第6図 図版8・

9・12)。短頸壺は本来は正位に置かれていたと思われる。

第7図1、2は壺である。1が口径10.3cm、器高3.6cm、2が口径11.4cm、器高4cmを測る。ともにたちあがりは短く内傾し、体部、底部は偏平である。1の受部と休部の境は比較的明瞭にアクセントがつく。底

部外面は1に回転へらけずり調整、2に回転へらけずり調整の後に軽いなで調整が施されている。ともに底部中央にはへら切り痕が残る。

3は直口壺である。口径5.5cm、器高10.3cmを測る。口縁部はやや外傾し、肩部は張り底部は丸底である。体部から底部にかけては回転へら削り調整が施される。

これらの須恵器はいずれも山陰地方の須恵器編年の第3期に相当するが、第3期でもやや新しいと考えられる。出土状態から、この横穴墓は盗掘を受けた形跡は見られず、また追葬が行われたとは考えにくい。

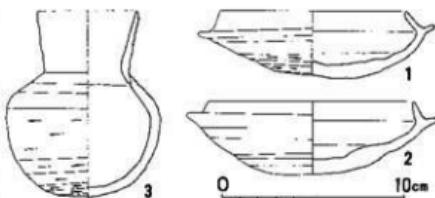
2号横穴墓（第8～12図 図版9～11）

1号横穴墓の東約10mに位置する。床面の高さは約33.9mで、1号横穴墓より約1.5m高い位置に作られている。この横穴墓は表土を除去した時点で確認され（図版10）、調査の結果残存しているのは玄室の一部だけであることがわかった。羨道や前庭部などは地崩れなどで流失したものと考えられる。

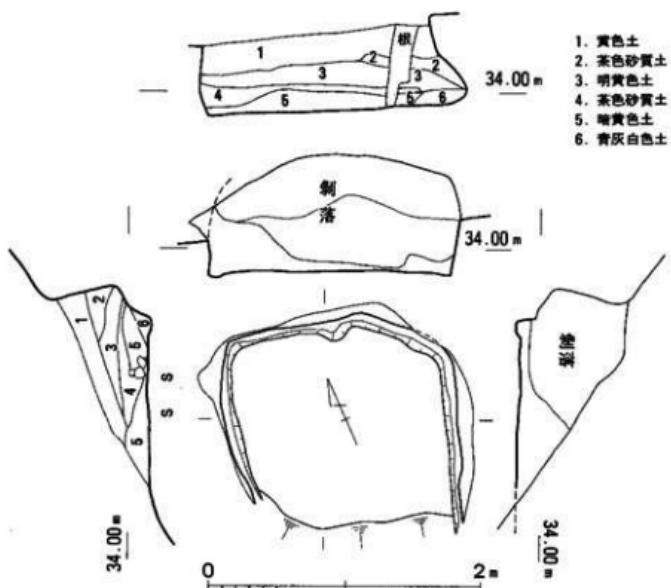
検出された範囲は、奥行きが1.5m、幅が1.7m、高さが最も残りがよいところで80cmである。床面はほぼ水平で、周囲には幅10cm、深さ2～5cmの排水溝が作られている。天井部は完全に崩落し、側壁、奥壁も大部分が剥落しているため本来の形態は不明であるが、排水溝が奥壁と側壁の境で直角に近く屈曲していることから、少なくとも平面形は長方形または正方形のプランであったことがわかる。

玄室内には全面に上が堆積していた（第8図 図版10・11）。土層の堆積状況は天井の崩落土と思われる第5層が前面に堆積し第4～6層がレンズ状に堆積していたことから、まず天井が崩落した後に第2～6層が奥壁側に流入し、さらに第1層が丘陵斜面に沿って堆積したものと考えられる。

出土遺物（第9～12図 図版10～15） 遺物は須恵器蓋壺、同高壺、同龜、同提瓶、同直口壺、土師器高壺、同直口壺、鉄鎌、刀子などが出土している。いずれも小片が多く全形が伺えるものは少ない。これらはほとんどが床面より高い位置で出土し床面直上に近いものとしては第10図7と16



第7図 1号横穴墓出土土器 1:3

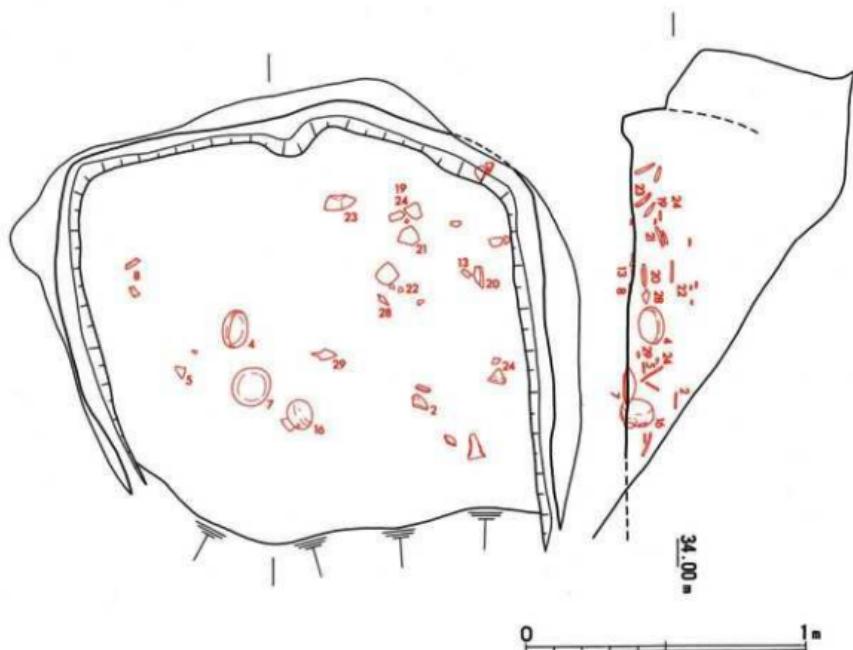


第8図 2号横穴墓実測図 1:40

の2点だけであった(第9図)。7は伏せた状態で、16は横転した状態で出土しており、比較的原位置に近い出土状態かもしれない。他の遺物はいずれも床面から浮いた状態で、原位性を保っているとはいいがたい。また、2号横穴墓前面の斜面からも土器が出土したが、これらも本来は2号横穴墓に副葬されていたものが横穴墓流失に伴って動いたものと考えられる。これら斜面出土の遺物の一部も2号横穴墓出土として第10・11図に掲載した。

1～5は須恵器蓋である。いずれも口縁部が「ハ」の字形に開く形態である。口径11.5～14.2cm、器高4.6cmを測る。4、5は稜が比較的明確に表現されているが、3は稜が不明瞭でわずかに稜がつく部分が屈曲するだけである。4、5は沈線または凹線を2条引いて稜を表しており、稜は鈍く鋭さを欠く。天井部が観察できるのは1、2、4で、いずれも中央部分にやや削り残しがあるものの回転へらけずり調整が施されている。口縁部内面に段や沈線を有すものはない。

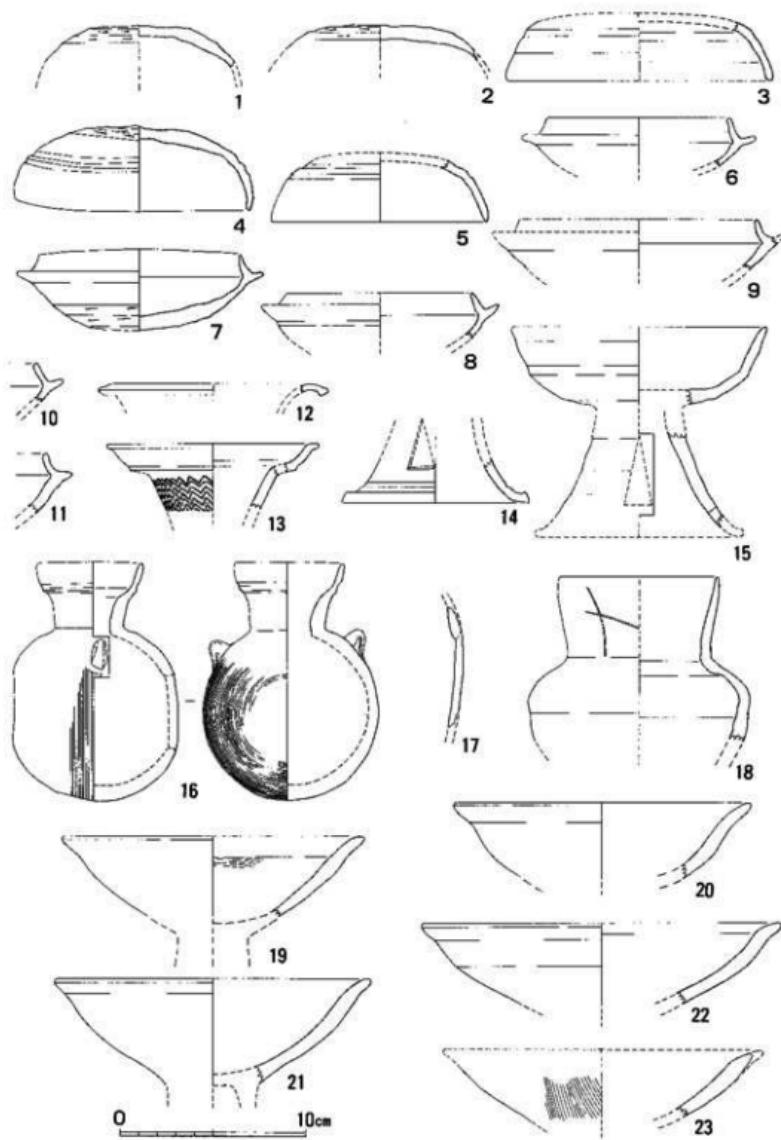
6～11は須恵器坏である。口径9.8～12.8cm、器高は全形が同える7が4.4cmを測る。いずれもたちあがりは短く内傾し受部内面には鋭く界線が巡る。今回出土した坏の中では8のたちあがりがとくに短く内傾している。底部の調整が観察できるのは7だけであるが、比較的ていねいに回転へらけずり調整が施されている。6～8は受部と体部の境が屈曲し比較的明瞭に区別できる。



第9図 2号横穴墓遺物出土状態 1:20

13は甌である。すべて小片で接合はできないが、胎土、調整、焼成などが同じであったことから、同一個体と考えた。口径は11.4cmを測る。頸部はラッパ状に開き、口縁部との境に明瞭に段および稜がつき口縁部はさらに大きく外反する。頸部には櫛状工具による波状文が施されている。14、15は須恵器高坏である。14は脚端径10.2cm、15は口径13.6cmを測る。14は器壁が薄く堅く焼きしまっているが、15は焼成は悪くやや器壁が厚い作りである。ともに脚部には透かしが入るが、15の透かしの形は不明である。14の脚端部近くには浅い凹線状の沈線が巡り、脚端部は面取りされている。15の坏部は口縁部が内湾気味に外傾し、口縁部と体部の境は鈍く屈曲するだけで不明瞭である。なお、15の坏部と脚部は直接は接合できないが、胎土、焼成、色調などほとんど変わりがないことから同一個体と考えた。

16、17は須恵器提瓶である。16は口径5.8cm、器高12.8cmの小型のもので、胴部は両面とも同様な膨らみをし球形に近い形である。頸部と口縁部の境には段および稜がつき、甌のような口縁部である。肩部には耳朶状の把手がつけられている。側面から片面にかけてはカキ目調整が施されてい



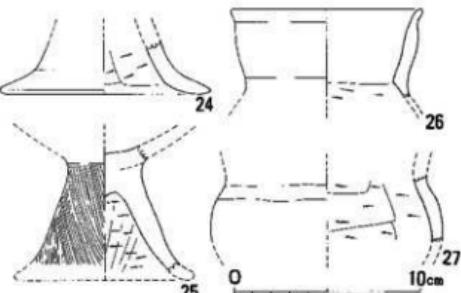
第10図 2号横穴墓出土土器 1:3

るが、その後なで調整が加えられているらしく不明瞭である。17は胴部小片で、内面には粘土板で開口部を塞いだ痕跡が多く残る。器壁は薄いが、16より大型の提瓶と思われる。

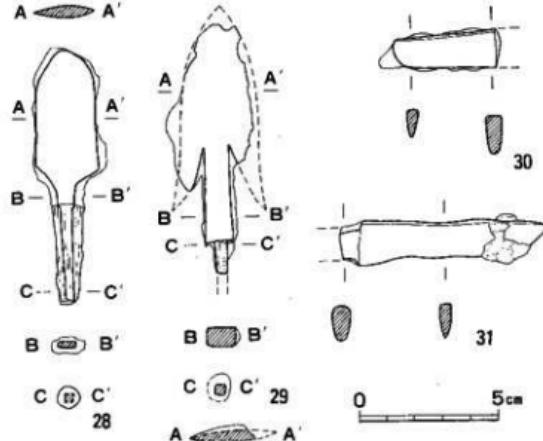
18は直口壺である。口径8.5cmを測る。口縁部は内湾気味に外傾し、肩は強く張る。口縁部には非常に細い「十」字形の沈線がみられるが、文様か杏かは不明である。外面には薄く自然釉がかかっている。これも小片が多く接合できるものが少なかったが、胎土、焼成、色調などから同一個体と考え、図上で復元した。12も壺口縁部と考えたが、小片のため明確ではない。蓋の可能性もある。端部は肥厚して断面形が三角形を呈す。口径は12.4cmを測る。

第10図19～第11図25は土師器高環である。図上では壺部5個体、脚部2個体を復元したが、この中には同一個体となるものも予想される。実際の個体数は3個前後と推定される。壺部はいずれも口縁部が大きく開き、口縁端部近くでさらに外反するものである。口径は15.8cm～19.2cmを測る。いずれも風化が著しく調整の観察は困難であるが、19の内面と23の外面上には刷毛目が残っている。また内面はなで調整が施されるようである。24は脚端部、25は脚筒部である。ともに脚端部近くで屈曲して、端部はさらに大きく広がる。両者とも内面にはへらけずり調整が施され、25の外面上には刷毛目および縦方向へのらけずり磨きがみられる。24の脚端径は11.2cmを測り、25も24と同様な大きさである。これらは22以外には赤色顔料が塗られている。脚部では25には外面だけの塗彩であるが、24は内外面ともに塗彩される。

26、27は土師器直口壺である。胎土、焼成などよく似ることから、同一個体の可能性がある。26は口径



第11図 2号横穴墓出土土器 1:3



第12図 2号横穴墓出土鉄器 1:2

10.2cmを測る口縁部で、頸部から内湾気味に外傾し口縁端部は外反する。27は最大径12.6cmの胴部で、中程度強く張る。ともに胴部内面にはへらけずり調整が施され、外面には赤色顔料が塗られている。

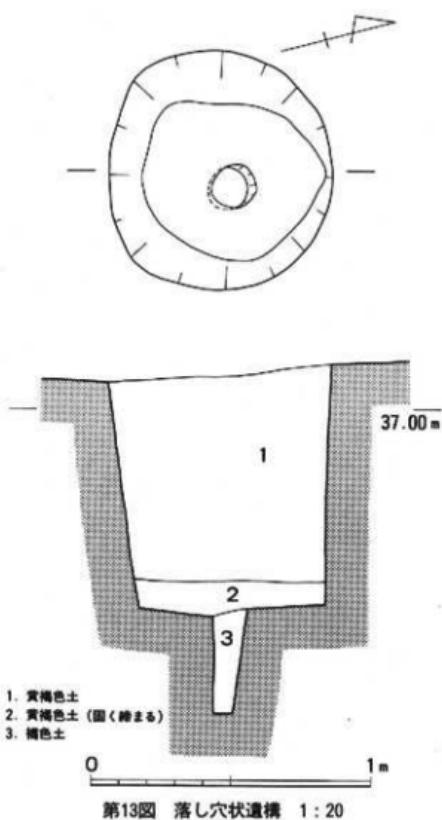
第12図28、29は鉄鎌で、ともに短頸鎌である。28は全長9.1cm、鎌身長4.7cm、鎌身関部幅2.3cm、鎌身厚0.5cm、籠被部長0.8cm、籠被部幅0.6cm、籠被厚0.2cm、茎部長3.4cm、茎部幅0.3cm、茎部厚0.3cmを測る。ふくらから先端にかけては丸く、鎌身側縁は直線的である。関は撫閥で、籠被部の長さは同じ時期で同様な形態をする上塙冶築山古墳出土鉄鎌や松廻1号横穴出土鉄鎌に比べるとかなり短い。茎部には木質がよく残り、矢柄がそのまま残っているように思われる。木質は断面形がほぼ円形で、径は0.8cmである。29は現存長8.8cm、鎌身長5.9cm、鎌身関部幅2.7cm以上、鎌身厚0.3cm、

籠被部長3.4cm、籠被部幅0.9cm、籠被厚0.7cm、茎部長1.2cm以上、茎部幅0.4cm、茎部厚0.4cmを測る。非常に残りが悪く鎌身右側縁は消失し、レントゲンによっても左側縁の形は明確ではない。そのため29の実測図復元線は他例を参考にしたものである。関部は長い逆刺がつくようである。籠被は28に比べると長く、茎部は木質が残る。

30、31は刀子である。30は茎部で、残存長4.3cm、幅1~1.3cm、厚さ棟側で0.6cm、刃側で0.3cmを図る。レントゲン撮影の結果では茎尻は丸いようである(図版15)。31は茎部が欠損している。残存長7.5cm、刀身幅1.3~1.6cm、関幅1.6cm、茎幅1cm、厚さ棟側で0.4cm、刃側で0.2cmを図る。刃部は直線的ではなく、研ぎによってかなり変形していると思われる。

落とし穴状遺構(第13図 図版16)

丘陵頂部から1個だけ検出された。平面形は円形を呈し、上面径80cm、底面径70cm、深さ90cmを測る。底面中央には径10cm、深さ40cmの小さなピットが穿たれている。土



第13図 落し穴状遺構 1:20

層はピット中央の埋土が褐色、それ以外は黄褐色を呈していたが、底面部分では非常に堅く締まっていたため第2層として分層した。

4. 結語

今回の調査では横穴墓2基、落とし穴と考えられる土坑1が検出された。

横穴墓は土に穿たれているため、ともに地崩れなどによって原形をとどめるものではないが、比較的原形が伺える1号横穴墓は蒲鉾形を呈し、平面形は縦長の不整形な長方形である。玄室左側はていねいに矩形に掘られているのに対し右側壁は奥壁と直角にならず、前壁との境界もわずかに稜ができるだけで、一見片袖のプランにみえる。このような形態の横穴墓はこの近隣では八束郡玉湯町花立山4号横穴墓¹などがあるが、出雲東部地域では類例が少ない。松江市周辺では平面形が横長または正方形の横穴墓が優勢であり、縦長のプランは少ないとされる²。この周辺でもこの状況は変わらないようで、本遺跡の北側に隣接している弥陀原横穴墓群では発掘された4穴とも正方形プランである。ただ、弥陀原横穴墓群³では家形の天井部の棟線が主軸に平行するもの（4号穴）と直交するもの（2号穴）の両者が同一の横穴墓群に混在している。平面プランの二者が併存する状況は松江市域での横穴墓の密集地である意宇平野周辺とは、やや趣が違うように感じられる。

1号横穴墓の四壁には工具の痕跡が明瞭に残る部分がある。工具痕は、幅5～10cmのもので、いずれも先端がカーブを描いている。のことからこの横穴墓は刃先が丸い工具を使用して造られたことがわかる⁴。この工具痕から推定すると、「U」字形の鋸先か手斧が使用された可能性がある。横穴墓の築造には数種類の工具が使い分けられたことがわかる例が報告されている⁵が、本横穴墓では工具痕は一種類しか確認できなかった。

これらの横穴墓の時期は、出土須恵器から1、2号横穴墓とも、山本清編年の第3期の新しい時期に当たる。のことから考えると、ここでは両者が多少の前後差はあったとしても時間をあまり置かずに造られたか、ほぼ同時と考えられる。

出土遺物をみると、1、2号横穴墓とも第3期の新しい時期のものばかりが出土し、この前後の時期の遺物は全く出土していないという特徴がある。これは、両者ともに追葬が行われなかつた可能性を示すと思われる。1号横穴墓については、出土遺物がすべて原位置に近い状態であったことから、盜掘を受けていない可能性が高い。

以上、とくに今回発掘した横穴墓についてまとめてみた。乃木福富町周辺では横穴墓の報告が少なく、その実態はよくわかっていない。この地域の横穴墓について網羅的に検討し、松江市域東部、八束郡玉湯町以西、とりわけ出雲市域などと詳細に比較すれば、当地方の横穴墓の研究は新たな展

開が期待できると思われる。

- 注1 勝部衛「玉湯・花立横穴群」「鳥取県埋蔵文化財調査報告書第XV集」1989
- 2 門脇俊彦「山陰地方横穴墓序説-特に四注式系横穴墓の分布と時期について」「古文化論叢」第7集1980
- 3 岡崎勇次郎・飯塚康行「松江・弥陀原横穴群」「島根県埋蔵文化財調査報告書第XVI集」1991
- 4 西尾克己・原田敏熙・守岡正司「出雲西部における横穴墓の様相」「湖陵町誌研究」第1号1992
- 5 鳥取県教育文化財団「大塔山横穴墓群」1987

第5図に示した加工痕拓影は型取りをした標本を拓本にしたもので、実際の加工痕とは反転した状態である。標本の採集は歯科用印象材(商品名「トシコンヘビーベース」)を使用した。

1号横穴墓出土土器一覧表

辨 別 番 号	図 版 番 号	器 種	法 量 (cm)			形 態	文 様、 手 法	備 考
			口 径	器 高	底 径			
第7回 -1	12	坏	10.3	3.7		たちあがり内傾	ヘラ切り後回転ケズ リ、中央削り残し	
第7回 -2	12	坏	11.3	4.0		たちあがり内傾	ヘラ切り後ナデ	底部にクシ描状のキ ズ
第7回 -3	12	直口壺	5.5	10.2	(最大径) 8.5		回転ケズリ、底部、 一端その後回転ナデ	

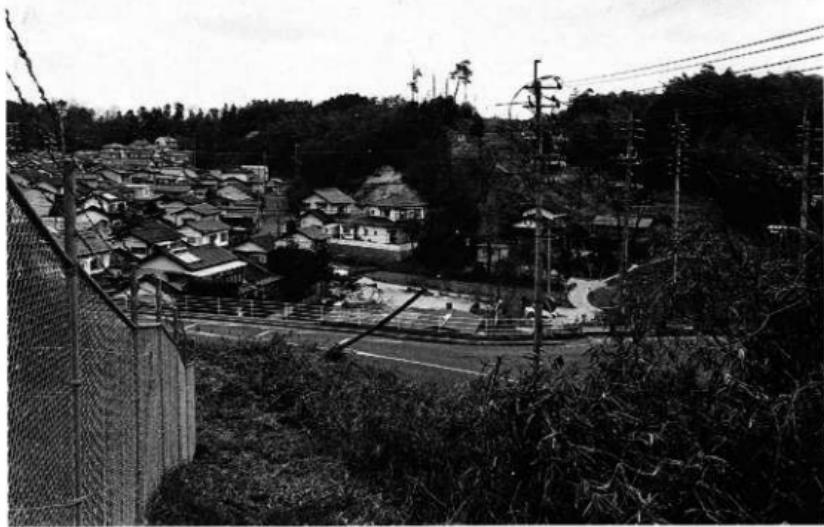
2号横穴墓出土土器一覧表

辨 別 番 号	図 版 番 号	器 種	法 量 (cm)			形 態	文 様、 手 法	備 考
			口 径	器 高	底 径			
第10回 -1	12	蓋				天井部丸い	回転ヘラ削り、中央 は未調整?	回転方向不明
第10回 -2	12	蓋					回転ヘラ削り	右回転
第10回 -3	12	蓋	14.2			縁は鈍く屈曲		
第10回 -4	12	蓋	12.7	4.6		縁は凹線2条による	回転ヘラ削り	歪み著しい 右回転
第10回 -5	12	蓋	11.5			破非常に鈍い		
第10回 -6	12	坏	9.8			たちあがり内傾		
第10回 -7	12	坏	10.8	4.4		たちあがり内傾	回転ヘラ削り	歪みあり、右回転
第10回 -8	12	坏	10.0			たちあがり内傾		
第10回 -9	12	坏	12.8			たちあがり内傾		
第10回 -10	12	坏				たちあがり内傾		
第10回 -11	12	坏				たちあがり内傾		外面自然釉
第10回 -12	12	蓋?	12.4			口齊三角形に肥厚		蓋または脚の可能 性もある
第10回 -13	12	瓶	11.4			屈曲部明瞭	波状文	口縁内面に自然釉

押番号	図番号	版番号	器種	法量(cm)			形態	文様、手法	備考
				口径	器高	底径			
第10回 -14	13	高 环				10.2	端部面取	三角形通し 浅い丸擦	
第10回 -15	13	高 环	13.6					透しあり	
第10回 -16	14	提 瓶	5.8	12.8			口縁屈曲、胸部球形 に近い。把手耳染状	カキ目、ナデ	
第10回 -17	13	提 瓶					肩部附茎部		自然釉
第10回 -18	13	直口壺	8.5		(最大径) 12			頸部に細沈線(キズ の可能性あり)	
第10回 -19	13	土師器 高 环	16.0				口縁わずかに外反	内面一部ハケ目	赤色塗彩
第10回 -20	13	高 环	15.8				口縁わずかに外反		全面風化、赤色塗彩
第10回 -21	13	高 环	16.8				口縁わずかに外反	ナデ	赤色塗彩
第10回 -22	13	高 环	19.2				口縁外反。浅身	ナデ?	風化
第10回 -23	14	高 环						ハケ目、ヨコナデ	赤色塗彩
第11回 -24	13	高环脚			11.2		端部強く屈曲	内面ケズリ	内外とも赤色塗彩
第11回 -25	13	高环脚			(高上部 径)4.1			ケズリ、ハケ目	赤色塗彩
第11回 -26	13	直口壺	10.2				わずかに内湾 上端外反	ケズリ	赤色塗彩
第11回 -27	13	直口壺			(最大径) 12.6			ケズリ	赤色塗彩
第12回 -28	14・15	铁 鏊		(金長) 9.1			蓋被短い		木質部残る
第12回 -29	14・15	铁 鏊		(金長) 8.8					
第12回 -30	14・15	刀 子 (茎)		(金長) 4.3	(厚) 0.6				
第12回 -31	14・15	刀 子		(金長) 7.5	(厚) 0.6				

図 版





松本古墳群遠景



松本古墳群近景（調査前）



松本古墳群丘陵頂部（調査前）



松本古墳群近景（調査後）



1号横穴墓全景



1号横穴墓挖出状况

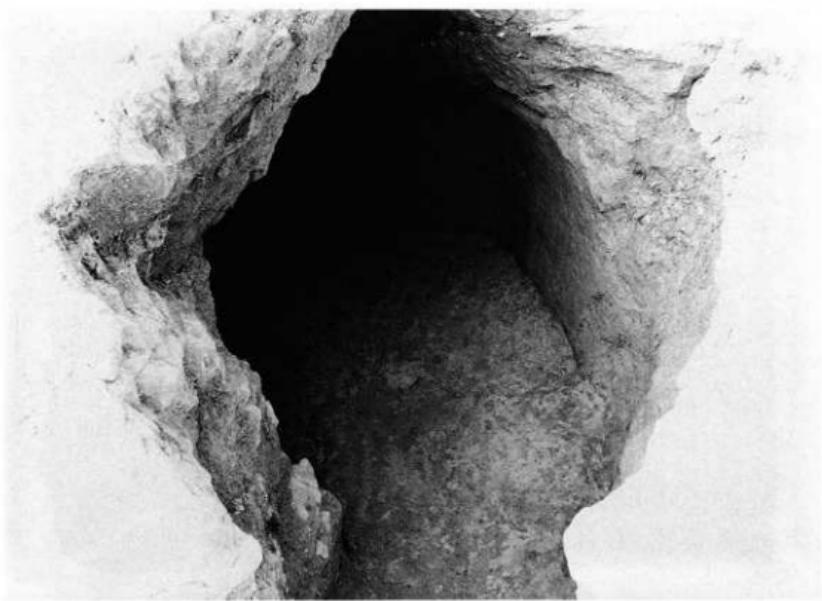
图版 4



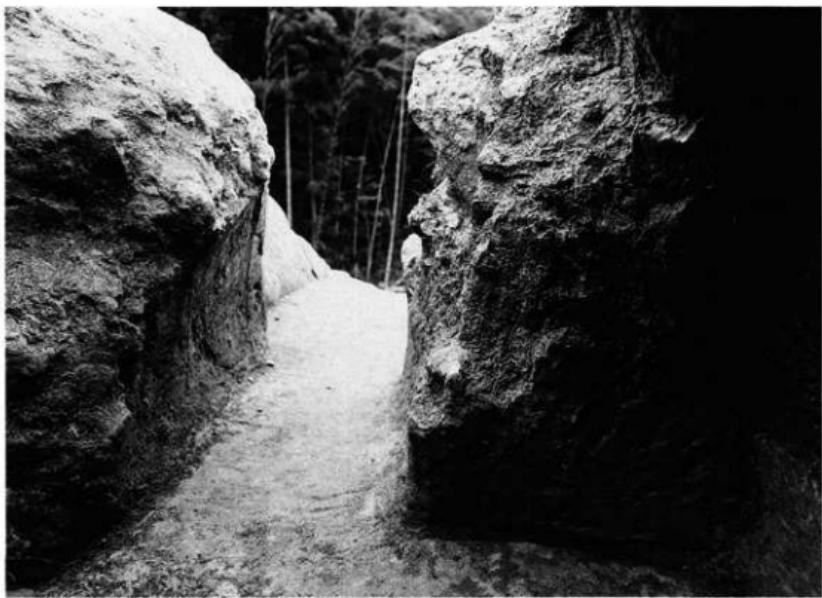
1号横穴墓玄室土层堆积状况



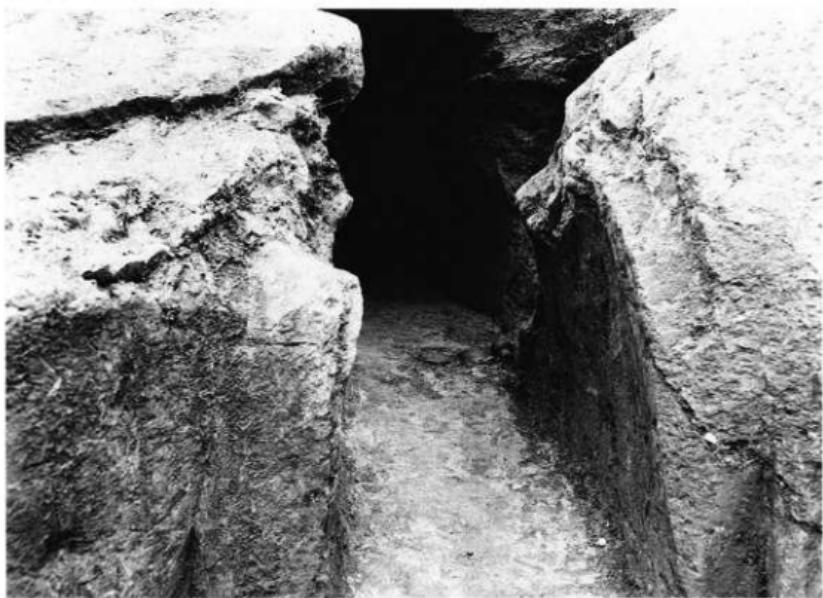
1号横穴墓羨门土层堆积状况



1号横穴墓玄室



1号横穴墓玄室前壁



1号横穴墓羨門・羨道



1号横穴墓右侧壁加工痕



1号横穴墓奥壁加工痕



1号横穴墓前壁加工痕

图版 8



1号横穴墓土器出土状态



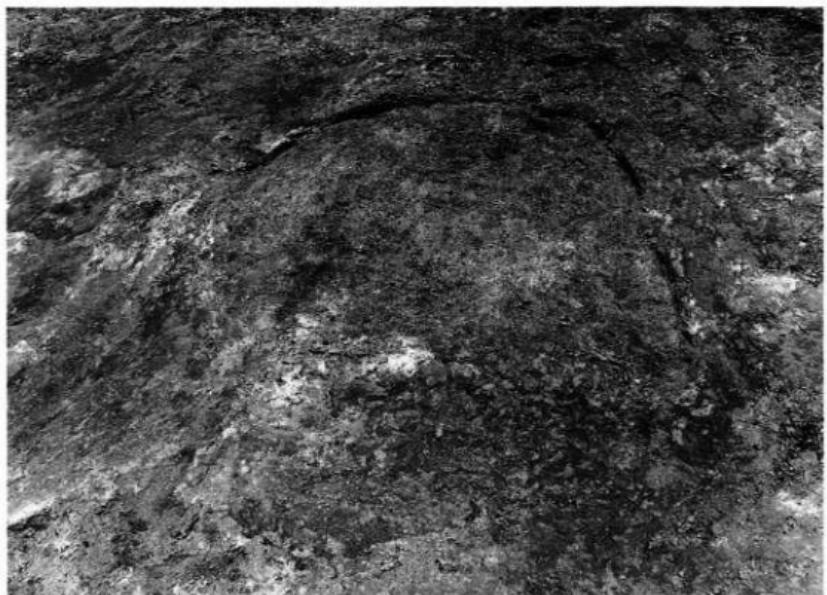
1号横穴墓土器出土状态



1号横穴墓土器出土状態



2号横穴墓全景



2号横穴墓検出状況



2号横穴墓土層堆積状況



2号横穴墓土层堆积状况



2号横穴墓遗物出土状况



7-1



7-3



7-2



10-4



10-7

1・2号横穴墓出土土器



10-1



10-2



10-3



10-5



10-6



10-8



10-9



10-10



10-11

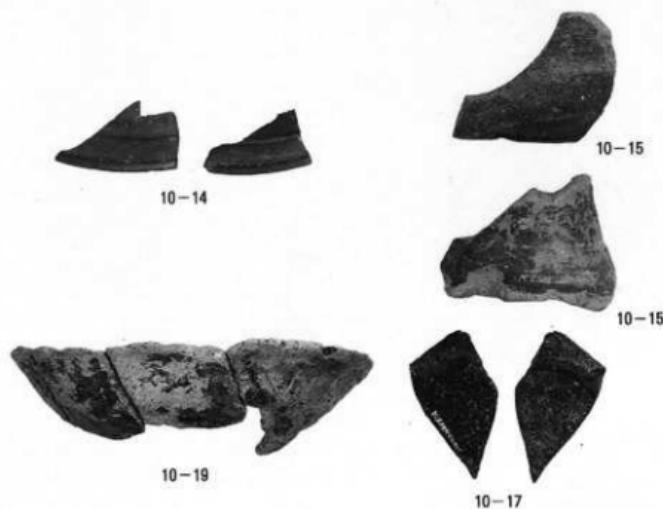


10-12

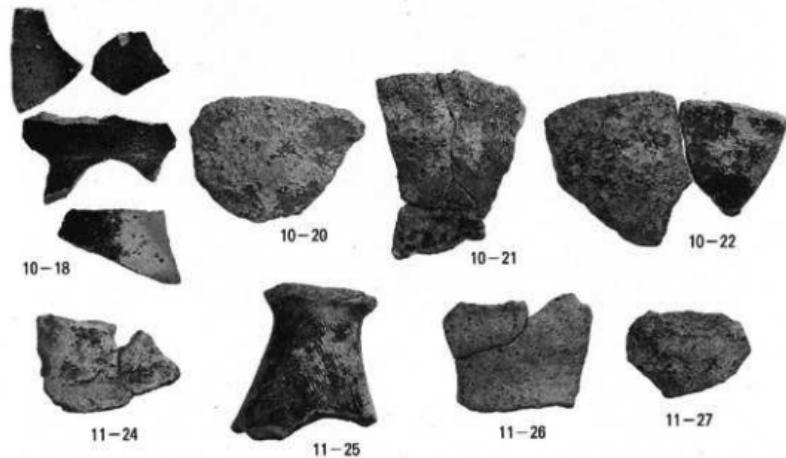


10-13

2号横穴墓出土土器



2号横穴墓出土土器



2号横穴墓出土土器



10-16



10-16



10-23

2号横穴墓出土土器



12-28



12-29



12-31



12-30

2号横穴墓出土铁器



12-30



12-29



12-31



12-28



落し穴状遺構



落し穴状遺構土層堆積状況

平成6年3月24日 印刷
平成6年3月29日 発行

—松本古墳群—

一般国道9号松江道路(西地区)建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書1

編集・発行 局根県教育委員会
松江市殿町1番地
(理藏文化財調査センター
TEL (0852) 36-8608)
印刷・製本 柏村印刷株